

「里山の維持再生ゾーン」の実現に向けて

～市民協働による持続可能なまちづくりのモデルケースとして～

【「里山」の役割】

「里山」は、人々が生活する里に近い森のことで、市では森と連続する田んぼや畑などの「里地」を含めた概念で使用しています。

かつての里山は、家庭や産業で使用する薪や炭、水田に必要な肥料などの供給源として、人々の生活になくはないものでした。また、人々に利用されることで適切に管理された里山は、山菜などの食料やきれいな飲み水の提供、水害や土砂災害の抑制など、私たちにさまざまな恵みや生活の安全をもたらしてきました。

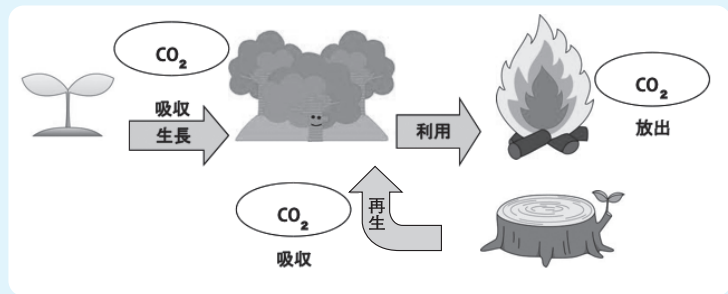
近年、特に学研木津北地区の「里山の維持再生ゾーン」のように都市に近い里山は、日々の生活にやすらぎを与える景観の形成や、生きもの観察や野外活動などの楽しみを提供してくれる場としても、その価値が見直されています。

【持続可能な社会のモデル】

このような里山の恵みは、一度消費してしまえば終わりという使い捨ての資源ではなく、切り株から木が再生することなどによって、繰り返し利用できる持続可能な資源です。かつての里山では、植物の再生の周期をよく理解して、適切な時期に必要な分だけ利用するサイクルが確立されていました。

また、植物は大気中の二酸化炭素を自分のからだに固定しながら生長するので、植物を利用することで二酸化炭素が発生したとしても、石油などの化石燃料と異なり、大気中の二酸化炭素が増えることはありません。

このような里山のサイクルは、「SATOYAMA」として国際的にも循環型社会のモデルとして認識されています。



【「里山の維持再生ゾーン」の現状】

現在の学研木津北地区「里山の維持再生ゾーン」は、薪や炭として利用されなくなったクヌギなどの木がものすごく大きくなってしまったり、放置された竹林が雑木林へ広がったりして、美しい里山の景観や自然の恵みが失われつつあります。

木が大きくなりすぎたり緑が広がることは、一見良いことのように思えますが、大きくなりすぎた木は倒れやすかったり、放置された竹ばかりの林は薄暗くて他の植物や生きものがあまり生息できないなどの問題があります。

このゾーンには、南山城地域最大の山城（やまじろ）跡である鹿背山城跡が有りますが、ここでも茂り過ぎた竹で山城特有の地形が見えなくなり、大木が根っこごと倒れることで地下の遺構が傷つけられたりしています。

このように、里山が放置されることは、そこに暮らしている生きものたちに悪影響があるばかりでなく、私たちの祖先が長い時間をかけて築いてきた歴史や文化にも影響を与えています。

【これからどうするの？】

「里山を放置すると大変だから、みんなで整備しに行こう！」と言われても、木なんか切ったことないし、危なくて大変そうでなかなか行けないですね。

現在、この「里山の維持再生ゾーン」では、5つの団体が活動しています。目的は、緑の中で活動を通じた交流をはじめ、鹿背山城跡の景観を保全したり、里山資源の持続的な活用、また特産品の生産技術を伝承しながら恵（めぐみ）を分け合ったり、放棄水田を耕して貴重な生きものの居場所を整備するなどさまざまです。

また、このような活動によって整備された場所は、「こどもエコクラブ」の環境学習などのフィールドとしても利用されています。

6月号からは、活動を体験していただける機会の創出をめざし、活動の魅力を紹介していきます。

